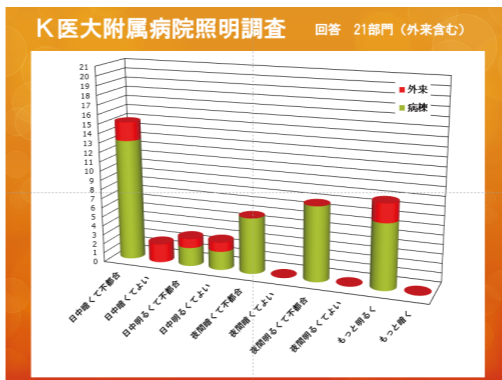


**科研費**  
KAKENHI



京都造形芸術大学と三つの医科大学が協働しながら三年間取り組んだ研究報告を、本学研究分担者である森本が行う。平成二六年度に科研費基盤研究(C)「芸術を応用した患者安全教育プログラムの開発―学習と改善の安全文化育成を目指して―」(研究代表.. 山口悦子)が採択された。本研究には京都府立医科大学、大阪医科大学、大阪市立大学の三医大の医療安全担当者に加え京都造形芸術大学から森本玄が研究分担者として、由井武人・北村英之が研究協力者として参加した。各医大が希望するテーマの安全教育プログラムを実現するため、それぞれに芸術家が参加。その候補は北村が挙げ、森本・由井が選定・調整した。そして、二七年度から二八年度にかけてプログラムを開発・実施お

よび評価を行い、他施設でも実施できるよう実施ガイドラインが医療メンバーによって作成された。成果として、第一に、京都府立医科大学では環境デザイン学科准教授・ヤギタカシ氏に依頼し、安全な環境を照明の視点から見直すことをテーマに、講演会と『安全な病院環境を考えよう!』光のワークショップ』を実施した。第二に、大阪医科大学では美術家イチハラヒロコ氏をアドバイザーに「患者さんやご家族と一緒に安全意識を高めよう!」医療安全標語プロジェクト』を行った。患者・家族から医療安全標語を集め、優秀作品を院長や医療安全推進部長が市民医学講座で表彰した後、ポスターに仕立てて院内に展示した。第三に、大阪市立大学では「高めよう! 気づき力。極めよ

う! チーム力。くアニメーション制作プロジェクト』と題し、キャラクターデザイン学科の村上聡氏・岩本守弘氏および学生有志と協働して、患者の重症化を防ぐ教育プログラムの教材としてアニメーションを共同制作した。この度の共同研究によって、これまで本学リアルワークプロジェクトで実践してきた院内での壁画制作や作品設置のような関わり方に留まらない、芸術・デザインの様々な専門性を生かした医療安全に対する改善提案の可能性が広がった。

まず、京都府立医科大学では、病院建物の照明と機能・場について医療従事者と利用者双方の視点から考えるきっかけとなった。大阪医科大学の例でも同様に、医療その家族など、病院利用者の視点を取り込むことで医療安全の意識を院内全体で共有できた。また、大阪市立大学の例では、国内外の医療系学会でも、アニメの手法を用いた教材とその完成度、質の高さに高い反響と評価が得られたと聞く。そして、本学キャラクターデザイン学科の学生たちが医療安全について各々の専門能力を発揮できたことは、芸術による社会貢献への意識醸成に繋がるものであり、教育上も大きな意味が認められる。

今後、芸術を応用した医療安全の研究を進めることでその効果が実証されれば、特にデザイン領域での実践と展開に、大いに期待がもてるだろう。